

# 湧水町 アーモンドで創る未来



## アーモンドの花言葉は「希望」

アーモンド栽培で地方創生へ挑戦。

### アーモンドの花は美しい

アーモンドの花を見たことがあるだろうか。アーモンドと聞くと実のイメージが強いが花は白と淡いピンクの美しくかわいらしい花を咲かせる。広大な土地に一面アーモンドの花が咲いている。想像しただけでワクワクしないだろうか。

鹿児島県の湧水町。名水百選にも選ばれている霧島山麓丸池湧水にもあるように自然に馴染みの深い町であるが、本年度から国の地方創生の先駆的事業分(タイプー)の交付対象となり、「アーモンド等果樹推進事業」に取り組む。

湧水町には、年間約10万人の来場者がある「霧島アートの森」があるが、他に魅力あるものが少ないという課題がある。そこで、霧島アートの森へ向かう町有地(約3.5ha)にアーモンドの苗を2千本植える計画である。町としては、アーモンドプロジェクトを成功させ、交流人口を増加させていきたい狙いだ。



▲ 左から企画課課長 福吉 康祐氏・町長 米満 重満氏・副町長 宮園 昭一氏・当金庫業務執行役員 内田健一郎

アーモンドの花は、3月からと開花が桜に比べて早く、また時期も4月あたりまで長いという特徴がある。計画当初は、「花見」のためのアーモンド栽培を計画。その栽培する過程で育つ実を6次産業化も視野にいれながら計画を進めた。そうすることで、観光としてだけでなく、湧水町の農家の方や、新規事業として奨励できるといって考えている。

「アーモンドの花はとてもきれいなんです。初めて見た時、これは、実じゃない。花を見よう。」と思ったんですね。

結果ばかり見て求めていると、先がないように思うのです。花が「きれいだな」そして、「実」も良かった。その方が長く続くと思うし、夢があると思うのです。」

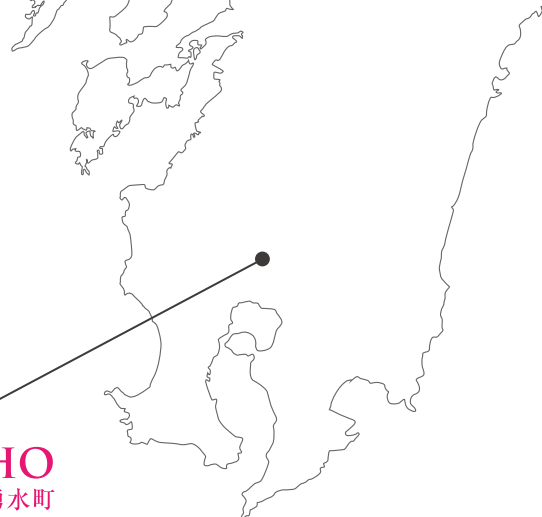
町長の米満重満氏は、自宅の庭にアーモンドを植え、花を愛でている一人でもある。

もちろん様々な課題もある。地域住民や地元事業者の理解と協力は不可欠である。また比較的栽培には強いアーモンドだが、日本特有の梅雨の時期や、鹿児島には多い台風被害の懸念など未知の世界への挑戦にはリスクが伴うのは当然であろう。

「他がやらないこと。できないことに取り組んでいかなければ地方創生にならないと考えています。失敗を恐れては始まらない。成功するまで、続けるということが大切。私達は、情熱を持って挑戦していきます。そして失敗しないという意気込み、産学官との連携という万全の形で臨みます。」と副町長の宮園昭一氏は話す。



この花はアーモンドの花です  
(参考写真です)



## YUSUICHO 鹿児島県始良郡湧水町

### INTERVIEW

湧水町を支える商工会。  
お話を聞いてきました。



湧水町商工会 会長  
池上 滝一 氏

### 地元の経営者に寄り添うこと一

商工会の会員も湧水町の地方創生の有識者会議に関わっています。地方となると中小ではなく小規模の事業者が多いという現状があります。全国の商工会の働きかけもあり、一昨年小規模振興基本法が制定されました。商工会としては、会員の現状を把握しながら、そういった国の制度や情報をいち早く伝える事や、商工会の強みを活かした支援を行なっていききたいと思っています。

湧水町は、従事者数をもみても1次産業に従事している経営者が多いので、やはりこの方々が潤って頂く事が重要だと思います。そして2・3次産業との連携を取って行く事が更に湧水町の未来には不可欠と考えています。

商工会の役割は経営者の支援。地元の経営者に寄り添う形で支援して、町の発展に取り組んで行きたいと思っています。

「湧水町は、地方版総合戦略においてアーモンド事業だけでなく新たな事業に総合的に取り組んでいくことで、後継者の育成や、i・Uターン人口の増加のための下地づくりをしていきたいと思っています。」  
湧水町企画課・福吉康祐課長は、今後のまちづくりについて、アーモンド事業を第一歩とし、町として現在かかえる問題に様々な事業を展開していきたい考えをのぞかせた。

地方創生には、各市町村毎に「まち・ひと・しごとづくり」を基本的な考えとして、戦略を立てている。そして、効果的な立案・実行・検証(PDCA)が必要とされており、実績が求められる。

### 花言葉は「希望」

湧水町は今年度、アーモンドの植栽を行い、今後は花の咲く時期にイベント等を計画実施し、湧水町へ人を呼びこんでいくこと。そして、アーモンドの実を特産品として、ナッツやオイル、スイーツなど加工品にも広げていくことで、国産アーモンドとして高付加価値のある商品づくりにも挑戦していく。

人呼び、それにより事業として成り立つ形へと成し得る事で、町に人が残り、町が活性化される。

アーモンドの花言葉は「希望」。  
湧水町のアーモンドプロジェクトは、まさに「まち・ひと・しごとづくり」へ輝く未来をもたらす希望への第一歩。近い将来美しい花を咲かせ、実を実らせることを期待してやまない。

### 湧水観光・RECOMMEND



幸田の棚田  
KOUDA no TANADA

湧水町の幸田地区にある棚田。「日本の棚田百選」にも選ばれています。見事な石垣からなり、季節により景色を変える棚田を楽しむことができます。



丸池の湧水  
MARUIKE no YUSUI

日本名水百選にもなっている丸池は、霧島山麓の水が、澄んだ池の砂底を押し上げてこんこんと湧き出ます。春には、周辺に桜が咲き誇り、夏には蛍も見ることができます。



雲海  
UNKAI

加久藤盆地から臨む雲海。空気が冷え込む季節になると、早朝、地表の水分が霧となって立ちのぼり、盆地ならではの壮大な雲海が見られます。



栗野岳温泉 南洲館  
KURINODAKE-ONSEN  
NANSHUKAN

西郷隆盛も愛した秘湯がある温泉宿。さらに、栗野岳の中腹に白煙を噴き続けている「八幡大地獄」と呼ばれる九州一の噴気孔がある。また、温泉で蒸した「鶏の地獄蒸し」は、ここの名物料理です。

# 人の繋がりが生み出す 長島町の地方創生。

## “ひと、”が繋ぐ地方創生

黒之瀬戸大橋。薄いブルー色の鋼トラス造で架けられた橋を抜けると長島町はある。人口約11,000人。ぶりの養殖で売上が約100億以上あり、世界一という町である。今この長島町が日本全国から注目されている。

長島町の地方創生事業ばかりに目がいってしまうが、その背景には“人と人の繋がりが、”がある。国に一番最初に人材支援制度を提案した井上貴至長島町副町長。そして、いち早く最初にその制度に手を挙げた川添健長島町町長。二人の良き理解者で地方創生戦略委員でもある入口良美氏。

長島町で出会った人と人の繋がりが生む地方創生への想いは、未来へ向かって大きく動いている。



写真 左：井上貴至副町長 右：入口良美社長

一番最初に  
地方創生人材支援制度に  
手を挙げた

長島町町長

川添 健

Kawazoe Takeshi

氏



▲平成28年2月23日  
鹿児島県町村会会長に就任

## 実現させて行く事が大切

長島町は、常にまちづくり事業に積極的であり、そして実現させていく。

「各市町村や団体には、万が一に備え基金が設立されています。長島町も基金がありますが、そのまま預金されていました。金利も低い中、株等の投資リスクのある運用は、安全面からも難しい。そこで、長島町は土地はありますので、太陽光事業を直営で運営しています。これは全国的にも例がないと思えます。」



川添町長は、地方創生人材支援制度にいち早く応募した。元役場職員出身である町長は、総務省との繋がりが重要であると思っており、総務省出身者に限定して要望したのだと言う。  
井上氏が着任して、感じた変化は、全国レベルでのPR力、スピード感、感性、発想、外部への働きかけ。  
これは、長島町の知名度の向上だけでなく、職員の意識改革へもいい影響になっているようだ。

“今”を持ちこたえれば

未来は明るい。

“今”実行することが大切。

「漁業も餌代が高く、価格も不安定なところがあり、厳しい現状もあります。現在国や県も力を入れてくれていますが、鯨の海外への輸出量も増えてきています。間違いなく良くなるが現場の“今”を持ちこたえなければなりません。」

未来へ希望はある。こんな時勢だからこそ町を支える役場として、様々な事業へ率先して挑戦していく。その姿勢が、長島町に暮らす人々や長島町の経済を担う企業へも次第に浸透してきているのかもしれない。

「一番最初に」  
地方創生人材支援制度を提案

長島町 副町長 井上 貴至 氏

inoue takashi



■井上副町長のブログ

「地域ミツバチ」は楽しい  
「地域ミツバチ」井上貴至の元気が出るブログ」  
副町長は、長島町を「長島大陸」と呼んでいる。  
長島町の魅力や地方創生について、日々情報発信  
中。副町長の思いが詰まったブログになっている。

地方に必要なのは  
中と外を繋ぐ人材。

「今地方に必要なのは、お金じゃなくて人材なんです。人材といっても中と外を繋ぐ、方向性を指す人材が必要なんです。」  
そういった考えから国に提案をしたという。実際、井上副町長は着任後、官公庁に限らず、様々な分野の人を長島町に招くなど連携を強化している。様々な政策や取組みが実現していくのには、こういった考えが根底にあり実行しているからなのだろう。

「長島町はいいものをいっぱい作っているんですけど、単に卸すだけでなく収益も考えながら。まずは知ってもらって、長島町はこんなに美味しいものがあるよっていうイメージを持ってもらえたら。そして長島町の取組みを他の市町村にもどんどん取り入れて欲しいと思っています。」

人と人を繋ぐ  
ミツバチ。

新しい花が咲く。

「地域には才能溢れる方もたくさんいらしゃるんですけど、地元業界のことしか知らない方もいらつやして。そうではなくて、僕が出会った素敵な人同士を繋げていくと、新しい花が咲くんじゃないかと思ってるんです。」副町長が描く地方創生には「ひと」が欠かせない。出会う人全てが共に未来を描く主役であり同志なのである。  
鯛で有名な長島町だが、副町長の名刺には「鯛だけじゃない長島町」とある。これからも新たな魅力を発信し、政策を実行していく長島町が楽しみである。



まこち  
真東風ぶりで6次化。

夢、長島町にのせて積極的に事業展開。

真東風ぶりは、鹿児島産の杜仲茶を餌に使用したブランド鯛。杜仲茶に含まれるポリフェノールが酸化を防ぐのと同時に余分な脂肪が付きにくくなる。約25年前から研究し開発したブランド鯛である。

元々養殖、生鮮一本で事業を行っていたが、2009・2010年連続で発生した赤潮被害を受け、加工会社(株)夢ながしまを設立。6次産業化へ取り組み始める。

「本当に当社の鯛の美味しさをわかってくれる人に届けたい。」今ではスーパーの卸売も取り止め、顧客の臨む形で直接対応している。そういったこだわりが真東風ぶりの付加価値を高めている。

また地方創生戦略委員でもある入口社長は、事業をおこなう経営者としても、前向きに事業展開している。

長島町も取り組んでいる太陽光発電事業も率先して行い、情報提供やアドバイスを行なうなど自ら行動で示してきた。

長島町の潮流を活かした潮流発電を産学官連携で取り組む予定。5年、10年、未来を考えた事業も考えている。

受け継ぎ。  
引き継いでいく。

「現在の長島町のいい流れを、副町長の任期が終わってからも持続させていく事が大切だと考えています。私だけでなく、若い世代にもどんどん参加してもらって、新しい事業を生み出していきたい、挑戦していくこと。長島町が長島町であるために地元の企業として又一人の町民として挑戦していきたいと思えます。」

入口社長の情熱も、また人を動かしていくに違いない。

代表取締役

株式会社 夢ながしま  
株式会社 社水  
株式会社 夢ながしま

入口 良美

氏

「一番最初に」

地方創生に協力した  
二人の良き理解者、